

JULY 30, 2023

Grayzone

ミアシャイマーとの対談：「ウクライナ戦争と長く続く危険」

John Mearsheimer: Ukraine war is a long-term danger

<https://thegrayzone.com/2023/07/30/john-mearsheimer--ukraine-war-is-a-long-term-danger/>



この記事はネットテレビ「グレイゾーン」の定期番組「出発進行」で司会アーロン・マテがミアシャイマーにインタビューしたものである。

小見出しは AALA ニュース編集部による

.....

アーロン・マテ：

プッシュバックへようこそ。アーロン・マテです。本日のゲストはジョン・ミアシャイマーです。彼はシカゴ大学のR・ウェンデル・ハリソン研究所の特別名誉教授（政治学）で、現在はご自身の『サブスタック』に執筆しています。ミアシャイマー教授、どうもご参加いただき、ありがとうございます。

ミアシャイマー：

お招きいただき光栄です、アーロン。

ウクライナの反復攻勢が失敗したわけ

マテ：

ウォール・ストリート・ジャーナル紙（以下WSJ）の記事に対するあなたの反応を伺いたいと思います。WSJには、ウクライナの大がかりな反攻と、それを後押しする西側の努力の状況について、こう書かれています。「この春、ウクライナが大規模な反攻を開始したとき、西側の軍事関係者たちは、キエフがロシア軍を撃退するのに必要な訓練や兵器（砲弾から戦闘機まで）をまったく持っていないことを知っていた。それでも彼らはウクライナの勇気と機知に期待した。しかしやはり、そうはならなかった」

from shells to warplanes—that it needed to dislodge Russian forces. But they hoped Ukrainian courage and resourcefulness would carry the day.

They haven't. Deep and deadly minefields, extensive fortifications and Russian air power have combined to largely block significant advances by Ukrainian troops. Instead, the campaign risks descending into a stalemate with the potential to burn through lives and equipment without a major shift in momentum.

:必要なも
攻作戦に追

私は実は長い間、このように予測してきました。

アメリカはウクライナを NATO に囲い込み、ウクライナを NATO の代理国にしようとしている。しかしその努力は、結局ウクライナの壊滅につながるのではないかと、

この WSJ という権威ある報道機関の発した率直な告白に対する、あなたの反応はいかがでしょうか。

ミアシャイマー

軍事戦術や戦略について詳しい人なら誰でも、ウクライナのリ反攻が成功する可能性がほとんどないことを理解していたはずだ。ウクライナ側にとって不利な要素があまりにも多く、大きな前進を遂げることはほとんど不可能だったのだ。

それにもかかわらず、西側諸国はウクライナを煽り、反攻作戦を強く押し進めた。実際、われわれは春に攻勢を開始するようけしかけた。その結果がこうだ。

「一体どうなっているんだ？」

これではまるで、自滅的なバンザイ攻撃 (suicidal offensive) を仕掛けるよう強制しているようなものだ。完全な逆効果です。
少なくとも当面は、守勢に徹する方がずっと理にかなっているのではないで
しょうか？

私が思うに、いま起こっているのは、次のようなことです。
2023年にウクライナ側が戦場で大きな成功を収めなければ、国民の戦争への支持は失われるだろう。その結果ウクライナ側は敗北し、西側諸国はさすがと退散することになる。
つまり、この攻勢が成功する可能性はせいぜいわずかだということです。そうだとわかっていながら、アメリカはこの攻勢を無理押ししたということです。

ウクライナの NATO 加盟は空約束だったのか

マテ：

西側諸国はウクライナを NATO の事実上の代理人として統合した。NATO 加盟を正式に加盟させることなく、正式加盟を約束することもなく、ウクライナを NATO の事実上の子分として統合した。

しかし、最近リトアニアで開催された NATO 首脳会議では、何も約束されませんでした。サミットの最後にウクライナに約束されたことは、将来的な NATO 加盟だけでした。それは 2008 年に最初に約束されたときよりも、さらに遠いものになったように、私には思えます。

今回の最終コミュニケでは、同盟国が同意し、条件が整えばウクライナを加盟させるという表現に収まったからです。それはどうやらアメリカの意向によるものらしい。しかしその条件が何なのかは明記されていませんでした。あなたは私の評価についてどう思いますか？ NATO のこの非常に曖昧な誓約をどう思いますか？

ミアシャイマー：

私はあなたの発言に同意します。そのうえでもう一步踏み込みたい。
NATO のストルテンベルグ事務総長は、ウクライナが紛争に勝利するまでは NATO に加盟しないと明言した。言い換えれば、ウクライナは同盟に加盟する前に戦争に勝たなければならないということです。
ウクライナは戦争に勝てる見通しはなく、そのつもりもありません。したがってウクライナが同盟に加わる見通しはありません。

ということで、この戦争は長く続くだろう。仮に“熱い戦争”から“冷たい戦争”になったとしても、水面下では長引き、“熱い戦争”がぶり返す危険性が常に存在します。

そのような爆弾を抱えた状況で、米国や西ヨーロッパ諸国がウクライナを NATO に加盟させることに同意するとは考えにくい。

理由は単純です。紛争が起きている最中にウクライナを NATO に加盟させれば、事実上、NATO は戦場でウクライナを軍事力で守ることを約束することになるからです。それこそ西側が望まない状況です。

NATO の軍隊が戦場に直接進出することは避けたいし、もっとあからさまに言えば、アメリカの軍隊が戦場に足を踏み入れることだけはなんとしても避けたい。

だから、ストルテンベルグが「ウクライナは（独力で）勝たなければならない」と言うのは、ある意味で理にかなっていません。結局のところ、ウクライナは国境内でロシア軍に決定的な勝利を収めなければならないのです。

しかし計算するまでもなく、それは無理なことです。あなたがおっしゃったように、ウクライナはロシア軍を駆逐することもないし、従って NATO の一員になることもないでしょう。

マテ：

ということは、ウクライナにおけるアメリカの政策は、見た目とは違って、まことに皮肉なものだったということになりますね。そう考えて良いですか？

そもそもこの戦争は、アメリカが「NATO 加盟の扉は開かれている」ということで、ウクライナの中立に同意しなかったために起こったものでした。機会があたえても、加盟へのロードマップを与えることを約束しない。

結局アメリカは、ウクライナを同盟国ではなく NATO の代理国にすることが目的だったのではないのでしょうか。その際に「言うことを聞いていれば将来同盟国にしてあげる」と空約束でだましたのではないのでしょうか。それでウクライナを納得させれば、米国と NATO は、ウクライナ防衛の義務を負う必要がなくなります。

ミアシャイマー：

そういう可能性もあります。しかしその推理については、もっと多くの証拠がないと何とも言えない。

私は少し違った見方をしています。私はアメリカの態度はずる賢さと言うより、愚かさに基づいていると思う。ウクライナの問題、そして旧東側諸国のさまざまな問題に関して、西側諸国はきわめて愚かであり続けた。この側面を過小評価することはできません。

私は確信しています。西側諸国は（ここでは主に米国のことを指しているが）、ウクライナとロシアの間で戦争が勃発した場合、西側諸国 + ウクライナが楽勝するだろう、そしてロシアは敗れるだろう、と信じていたと。

そして 2022 年初頭を迎えました。そこから戦争に向けた動きを見てみると、私にとって本当に印象的なのは次のようなことです。

戦争が少なくとも深刻な可能性であったことは明らかであったにもかかわらず、米国と西側諸国は戦争を防ぐために事実上何もしなかったということです。むしろロシアを刺激し、けしかけた。

これは想像しがたいことです。一体何が起こっていたのか？

想像としては、「もし戦争が始まったとしても、我々はウクライナ人を訓練し武器も与えた。これで彼らは戦場で自分たちの力を発揮できるだろう」と信じていたのではないだろうか。これがひとつ。

そして2つ目は、「私たちは魔法の武器を持っている。それは経済制裁だ」と考えていたのではないか。それが現実だと思う。
あなたが言うような「悪だくみ」のケースではないと思います。否定はできませんが。

繰り返しますが、これは経験に基づく判断で、事実による証明がいる問題です。あなたの解釈（狡猾な手段論）が正しいのか、それとも私の解釈（愚かな思い込み論）が正しいのかを確かめるには、もっと多くの証拠が必要です。

ただ私の感覚では、これは愚かな思い込みであり、修正困難という面では犯罪よりもたちが悪い。

タレーランの名言を使うならば、これは「思考の罫」(blunder) 大失敗（犯罪より悪い過ち）です。

経済制裁が効かなかったことへの評価

マテ :

制裁の問題については、最近、米国とその同盟国がロシアの原油価格に課せようとした価格上限を上回ってロシアが原油を販売するという画期的な出来事があったと報じられました。（アメリカは自分の決めた価格以上でロシア産原油を買うことを、禁じている。買った国には制裁が科せられる）
アメリカの制裁政策がうまくいかなかったのはなぜだと思いますか？ ロシアは今以上に打撃を受けると予想していましたか？

マースハイマー :

私はロシアが今よりもっと打撃を受けると考えていました。ロシア自身もそう思っていたと思う。それが、この紛争を見続けてきた私の感覚だ。ロシアは予想以上にうまくやっていると思います。

しかし、アーロンさん、私の考えでは、たとえ我々が制裁でもっと成功していたとしても、ロシアを屈服させることはできなかったでしょう。

その理由は非常に単純です。ロシアは、「ウクライナ問題で自分たちが存亡の危機に直面している」と考えているからです。

存亡の危機に直面しているとき、あるいは存亡の危機に直面していると考えているときは、計り知れない痛みでも、それを吸収することを厭いません。すべては戦場で敗北しないようにするために注ぎ込まれます。だから、制裁の有効性は最初から大いに疑問だったと思います。

ロシアは制裁による犠牲を覚悟しつつ戦争に踏み込んだわけですが、その後起こったことを注意深く見れば、客観的にも制裁に打ち勝てる絶好のポジションにいたことが明らかです。

制裁がどのように機能するかについて多くの時間を費やして研究した人なら誰でも、ロシアのような天然資源が豊富な国に対しては、制裁が大した効果をもたらさないことは当然の事実であり、驚くべきことではなかったはずで、そして実際にそうなっている。

ロシアは、西側諸国で失ったものの代わりとなり得る、あらゆる種類の潜在的な貿易相手を持っています。注意深く学ぶ本当の研究者は、ロシアに対して制裁が有効な場面は限られていると理解していたでしょう。

経済制裁の効果が限定されたものであったということは、西側の大きな誤算だったと思う。これに限らず西側にはさまざまな誤算がついて回っている。今でも彼らは誤算しています。

この戦争に関する西側の文献、とくに主要メディアを注意深く読むとよく分かりますが、人々はプーチンの誤算にこだわるのが大好きです。でも西側自身の誤算はそれよりはるかに大きい、それらは完全に無視されています。

マテ :

その点について、アンソニー・ブリンケン 国務長官が最近 CNN で語っています。そのことについてお答えください。

彼はプーチンがウクライナで何をしようとしているかについて語っていますが、そこで「プーチンはすでに負けている」と言っています。
これがアンソニー・ブリンケンの発言です。(以下録音が再生される)

「ロシアが達成しようとしたこと、プーチンが達成しようとしたこと。その目的は、ウクライナを地図から消し去り、独立と主権をなくし、ロシアに取り込むことだった。その作戦はとっくの昔に失敗している」

これがミアシャイマー教授のいうアンソニー・ブリンケン発言です。ところで、ブリンケンがロシアの戦争目的に言及していますが、それがプーチンの目的だったと思いますか？

プーチンのウクライナ侵入の目的

ミアシャイマー :

いいえ、そうは思いません。たしかに「プーチンの狙いはそこにあった」というのが、西側諸国の常識です。しかしこれまで何度も申し上げてきたように、そんな証拠は何もありません。

2022年2月24日にウクライナに侵攻したときに、プーチンがウクライナ全土を征服しようとしていたという証拠もありません

ただし、ブリンケンが言及しているのはプーチンの意図の問題です。彼の意図とは別にそれを実現する能力についても見なければなりません。

2022年2月にロシアがウクライナ領内に侵攻したのですが、あの小さなロシア軍でウクライナ全土を征服できると考えるのはお笑い草です。ウクライナ全土を征服するのなら、ロシア軍には数百万人の軍隊が必要だったはずで

す。
ウクライナの国土はいわば広大な農地だ。(訳注 黒土：温帯の草原地帯に発達する土壌。黒色の厚い腐植層、その下に炭酸カルシウムの集積層が重なる)

1939年にドイツ軍がポーランドに侵攻したとき、その数週間後にソビエトもポーランドに侵攻したことを思い出してほしい。両面からの攻撃とはいえ、ドイツ軍のポーランド占領にはドイツ軍およそ150万人を要したのです。

ロシア軍が2022年2月にウクライナに侵攻したときの兵力はせいぜい19万人だった。ウクライナを征服する能力などあるはずがない。現に彼らはウクライナを征服しようとはしなかった。

繰り返すが、プーチンの意図は戦前から明白で、ウクライナを征服する気はなかった。彼は十分に理解していた。「あの国全体を征服することは、ヤマアラシを飲み込むようなものだ」と。

マテ：

ロシアのウクライナ侵攻を、2003年にアメリカがバグダッドに侵攻したときと比較してみたい。

まず最初に首都を攻撃する。そして政府のトップであるサダム・フセインを倒し、捕え、処刑した。ロシアはそんなことをしなかった。それは明らかだ。

キエフの大統領府へのミサイル攻撃はなかったし、基本的なインフラへのミサイル攻撃もなく、鉄道は無傷のままだった。

初期攻撃の段階でプーチンが手に入れたのは交渉であり、ウクライナとロシアの間で暫定的な合意が成立するまでに至った。その暫定的合意とは、ロシアが侵攻前のラインまで撤退し、ウクライナは基本的に中立を約束するというものだった。

さまざまな報道から、西側諸国が邪魔をしたことがわかっている。ボリス・ジョンソンがやってきて、ゼレンスキーに『ロシアと協定を結ぶのなら、もう安全を保障するつもりはない』(If you sign a deal with Russia, we're not going to back you up with security guarantees)と言ったと伝えられている。

プーチンは最近、アフリカの指導者たちの前で演説した際に、ウクライナが署名したという文書を出し、西側諸国がこの協定を妨害したと非難した。

このような証拠に基づくと、こう言えるのではないのでしょうか。「停戦交渉は成立した。しかし西側が邪魔をした」と。これについてはいかがでしょうか？

ミアシャイマー :

2点ほど述べたい。

第一に、3月の末に取引の可能性はあったと思う。ただし西側諸国が干渉しなければ、うまくいったかどうかはまだわからない。ここには解決しなければならない非常に複雑な問題があり、イスタンブールでの交渉では完全には解決されていなかった。

第二に、先ほどあなたが言ったように、欧米諸国は、「停戦の必要はない。我々はロシアに勝てる」と思っていたからです。

3月に交渉が行われたとき、その時点ではウクライナ軍は戦場で自分たちの力を保っているように見えた。この単純な事実と制裁に対する我々の信念が相まって、我々はロシアを思い通りの場所に追い込むことができたと考えた。

だから、私はこういう社会心理が起こっていたと思う。「ロシアに大きな敗北を与える時が来たのだ！」

さて、プーチンのウクライナ進出の目標についてあなたが言ったことに話を戻す。私が言ったように、彼はウクライナを征服することに興味があったわけではありませんでした。

彼がやりたかったのは、ウクライナ人を強引に交渉のテーブルにつかせ、取引を成立させることだった。それが彼の望みでした。彼はドンバスを大口ロシアに編入することさえ望まなかった。それは巨大な頭痛の種になることを彼は理解していた。彼はドンバスをウクライナ国内に残すことを望んだ。

しかし、そのとき起きたことは何だったのでしょうか。それはプーチンが望んでいなかった方向です。西側諸国は、ウクライナ側が交渉から離れ、戦争が続くように仕向けたのです。そして、それが現在に至っています。

ミンスク合意をどう評価するか

マテ：

ロシアの主要な目標は、ウクライナに中立を約束させ、NATO に加盟させないことでした。同時にウクライナにミンスク合意を履行させることも含まれていました。

(訳注 ミンスク合意：ウクライナのタカ派によるクーデターの後、ドンバスでロシア系住民との間に紛争が起き、事実上の内戦となった。ミンスク合意はこの戦争を終結させるために、2015年に調印された協定。ドイツのメルケルとフランスのオランド元大統領が後見役となった)

1年前、ロシアがウクライナに侵攻して以来、メルケルやオランド元大統領は、ウクライナにミンスク合意を無視するよう話したことを告白しています。

彼らはこう言っている。「ミンスク合意は実際に和平を結ぶためのものではなかった。それは、ウクライナがロシアと対抗するために軍備を増強する時間を稼ぐためのものだった」

彼らの発言は、ロシアの侵入に激怒する内外タカ派の攻撃を受けてのものでした。タカ派はこう批判している。

「彼らは和平を仲介し、ドンバスでの戦争を終わらせようとした。その宥和的姿勢がロシアとプーチンを勢いづかせることになった」

実際のところメルケルらの真意をどう受け止めればよいのか、考えを伺いたい。

ミアシャイマー：

ミンスク合意のポジションをどう考えればいいのか本当に難しい。

たしかにオランド、ポロシェンコ、アンゲラ・メルケルの3人が揃って、ミンスク合意とそれに沿った和解交渉について、「当時は本気ではなかつ

た」とはっきり言っている。彼らがそう言うのであれば、それは真実のように思える。

一方であなたの言うように、「西側諸国での評判を下げないために、過去の行動を隠すために今になって嘘をついている」ということなのだろうか？ たしかにその可能性は否定できない。

どちらに真実があるのか、それは証明のしようがない。でも、こういう状況では私はどちらかといえば、その人の言うことを信じることにしています。アンゲラ・メルケルが、ウクライナ人の武装を助けたかったからミンスク交渉に参加したふりをしたただだと私に言えば、私は彼女を信じようと思いません。

でも、もしかしたら彼女は真実を語っていないかもしれない。確かなことは誰にもわかりません。

バイデン政権は NATO の東方進出をどう扱ったか？

マテ：

先ほどの話に戻ります、

2022年2月以前に、アメリカはこの戦争を防ぐために何もしなかったとい
って良いでしょう。

バイデン政権が、ロシアの核心的な懸念である NATO の拡張とロシアを取り
囲む NATO の軍事インフラに対処することを拒否したことを考えれば、その
ことは明白です。

ロシアが 2021 年 12 月に提出した条約案では、NATO はロシア周辺の NATO
軍事インフラを基本的に 1997 年以前のラインまで後退させることを提案し
ていた。

そのためバイデン政権は、現実主義者の観点から、わずかな例外を除いて
は、この問題を凍結し、そのような議論に一切応じなかった。

バイデン政権に、侵攻前に議論しなかった問題を、今から議論する余地はあ
るのでしょうか？

もし議論するつもりがないのであれば、私たちはどのような未来を見ていくことになるのでしょうか？

ミアシャイマー :

では、手短かに申し上げます。

2021年12月から2022年2月のあいだ、戦争に向かっていく過程でのアメリカの立場については、あなたの説明は正しいと思う。

しかし、西側諸国の人々は聞きたくないかもしれないが、ロシアが紛争を避けようと必死だったということも強調しておきたい。

まず強調しておきたいのは、「プーチンがウクライナを大ロシアの一部にするためにウクライナ侵攻を切望していたというのは、まともな議論ではない」ということだ。ロシアは戦争を望んでいなかったし、戦争を避けるために可能なことはすべてやったと思う。

ただ、その努力はむなしくアメリカに翻弄されるだけだった。アメリカは真剣に交渉する気がなかった。「もう終わりだ。話は終わりだ」...これがアメリカの態度だった。

では今日私たちにできることは何でしょうか？

いま、和平交渉を開始できる環境はない

事実上、あなたは戦争勃発前、あるいは戦争勃発直後の2022年3月、イスタンブールでの交渉が続いていた頃に戻れるかどうかを問うているのだと思います。

私はこう考えています。私たちが何らかの意味のある取り決めを行える段階はとうに過ぎていると。

まず第一に、現時点では双方が戦争の勝利に強くこだわっており、意味のある和平合意のようなものを交渉するとは考えにくい。双方が勝利する可能性

があり、双方が勝利にこだわっているのだから、一般的なレベルでの交渉は不可能でしょう。

しかし、詳細を突き詰めていくと、ロシアは現在征服している領土を維持することに固執しているようです。ロシアは、ウクライナが機能不全の「**残骸国家**」(Rump state) に成り下がり、将来ずっと NATO の有力な加盟国になれないようにしたいと考えています。

(訳注 : A rump state is the remnant of a once-larger government, left with limited powers 残骸国家は編集部でつけた仮訳)

だから、ロシアが最終的にやることは、ウクライナの領土の大部分を切り離し、ウクライナを経済的にも政治的にも立ち直れないほどの状況に追い込むことだと思う。それが、ウクライナが西側同盟の有力な一員とならないための確実な担保となります。

だから、ロシアが征服した領土を放棄し、2022年2月に存在した国境線に引き戻すことに同意するという考えは、現時点ではほとんど考えられません。

さて、ウクライナが中立国になり、NATOの一員になることをあきらめれば、次のような状況が想定されるかもしれません。

まず第一に、ウクライナがすぐに中立国になることに同意するとは思えません。

ウクライナは何らかの安全保障を求めるでしょうが、その安全保障を提供できるのは NATO 諸国だけです。だから、ウクライナと NATO の絆が完全に切れるとは考えにくい。

さらにロシア側は、ウクライナがある日『我々は完全中立だ』と言い出すのではないかと心配しています。そして次の日にはさらに気が変わって、西側諸国と何らかの同盟を結ぶことになる。

その結果どうなるか。ロシアはすべての領土を手放すことになり、ウクライナは中立ではなくなる。


だから、ロシアからすれば、ウクライナの多くの領土を征服し、ウクライナを機能不全の残骸国家にすることこそが理にかなっているのです。

ウクライナにとっても、国際関係全体にとっても暗い未来を描いているようで、こんなことは言いたくないのです。しかし、私たちがここまで作り出した混乱、私たちがここで作り出した災難の結果は、もはや和解の範囲内のものとして過小評価することはできないのです。

マテ :

(このコピーは) NATO 当局者が最近『ニューヨーク・タイムズ』紙に寄稿したものです。

ウクライナ国内のロシアとのいかなる領土取引も拒否するというアメリカの政策について、そしてウクライナの NATO 加盟に門戸を開くというこの政策についての発言です。


President Biden arrives for a news conference Thursday in Helsinki where he spoke about "this critical moment in history, this inflection point, the world watching to see." Doug Mills/The New York Times

自分たちの
っていると認



By **David E. Sanger**

David Sanger has written on great power competition for four decades, as a foreign correspondent for The Times and from Washington. He has been traveling this

その一節を読んで見たい。

「...リトアニアで開催された NATO 首脳会議において、アメリカやヨーロッパの高官たちが認めたように...

...このような約束は、本当の停戦や休戦交渉を始めることをより困難にしている。戦争が終わった後、ウクライナが最終的に NATO に加盟するという約束は、モスクワにとって、ウクライナの領土にしがみつき、紛争を存続させる強い動機となる」

ミアシャイマー :

その通りです。しかしそれなら、なぜ西側の指導者たちはウクライナを同盟に参加させるという方針を変えないのかという疑問が生じる。

この戦争の主な原因は、ウクライナを NATO に加盟させるという考えだった。それは証拠からも明らかだ。もし 2022 年 2 月以前にその政策を放棄していれば、おそらく今日の戦争はなかっただろう。

そしていったん戦争が始まると、ウクライナの NATO への加盟方針を二転三転させた。しかし絶対にあきらめなかった。それはロシアをますます刺激するだけでした。ウクライナが決してそっちに行かないように、あるいは、もしそうなるのならウクライナが機能不全の残骸国家となるまで叩くように仕向けるだけだ。

つまり西側諸国は、ウクライナを破壊しようとするロシアを煽動するといふ、とても重要な役割を担っているのです。戦略的な観点からも、道徳的な観点からも、私にはまったく意味がわかりません。ウクライナで起きている死と破壊を考えれば、このような事態は簡単に避けられたはずだ。想像するだけで胃が痛くなりませんか。

(It makes you sick to your stomach just to contemplate it all)

マテ :

武器に関して、これまでのアメリカの政策をどう思いますか？

バイデン政権は、ある兵器はウクライナには送らないと公言し、その後、譲歩してその兵器を送るということがこれまで何度もありました。

これとは対照的に、最近、アメリカ国防情報局 (DIA) のジョン・キルヒホーファー氏は、戦争は膠着状態にあると述べました。これはバイデン氏やブリンケン氏が言っていることとは異なります。彼はまた、これらの重火器はどれもウクライナで軍事的突破を可能にするようなものではないとも述べています。



ジョン・キルヒホーファーの発言は次のとおりです。

「確かに、我々は少し膠着状態にある。夏にウクライナが反攻に転じたことで、ウクライナは少しずつ前進している。

ウクライナが反攻に転じる際、西側諸国がウクライナに提供する装備のいくつかに注目しがちだが、これはおかしいことだ。たしかに HIMARS は、センセーショナルな戦術的な出来事につながった。

(訳注 HIMARS : 2月に始まったロシア侵攻を受けてアメリカが供与した高機動ロケット砲システム。トラックの車体後部にロケット弾の発射装置を搭載した車両で、高い機動力を誇る。しかしまもなくロシアは妨害電波で対抗し始めた)

ストームシャドウ・ミサイルも同じような経過をとった。そして今は改良型通常弾やクラスター爆弾の二重目的について話している。

(訳注 ストームシャドウ : 5月からイギリスが提供し始めた長距離巡航ミサイルで、戦闘機から発射される。最大 300 キロメートルの距離から攻撃できる)

しかし残念ながら、それらはどれもウクライナが期待しているような聖杯 (the holy grail) ではない」

要するに国防情報局のスタッフが事実を認めたわけです。しかしホワイトハウスの考えには、そんなことは入っていないようで、以前は交渉のテーブルから外していた重火器システムを、じわじわと提供し続けています。

ミアシャイマー :

西側諸国とウクライナが絶望的な状況にあることは間違いないと思います。あなたは「膠着状態」という言葉を使った。たしかにある意味では膠着状態だ。

各陣営がどれだけの領土を獲得したかに注目すれば、膠着状態のように見えるからだ。しかし、私は占領地の広さを「戦争で何が起きているか」の重要な指標とは見ていない。

ウクライナ戦争のような消耗戦では、重要な指標は死傷者率比較だ。それこそが注目すべき点です。

各陣営が徴兵できる人数、軍に供給できる人数に注目し、次に死傷者率比較に注目したい。

私見だが、死傷者率比較は、ウクライナ人よりも多くの人口を抱えているロシア人に決定的に有利だ。ウクライナにとっては悲惨な状況だ。死傷者から見れば、ウクライナがこの戦争に勝つことはほとんど不可能であり、ロシア軍が勝つ可能性が高い。

つまり、あなたが西側諸国なら、この状況をどう是正するかということです。ウクライナ人を戦闘に参加させ続けるために何をするのか？

ここで思い出してほしいのは、ロシアには強大な産業基盤があり、たくさんの重機、たくさんの大砲、たくさんの戦車といった軍備があるということだ。

ロシアには、たくさんの装備を生産する組立ラインがある。ウクライナには組み立てラインがほとんどなく、兵器は完全に西側に依存している。

となると、問題は何を与えることができるかということになる。ウクライナ側が持っているものには限界がある。彼らに与えることができるような大砲はもうない。だから、クラスター弾を与えても不思議ではない。

ここ数カ月、彼らが本当に必要としているのは砲兵なのに、戦車を与えることの意義ばかり強調してきたのです。つまり、私たちは多くの兵器を生産でき、そのための巨大な産業基盤を持つ国に喧嘩を売ってしまったのです。そして同盟国、つまり我々のために戦い、戦場で汚れ仕事をするウクライナは、自前の武器を持っていない。かつまた、彼らに提供できるものには限界がある。

私たちは彼らに HIMAR ミサイルを与え、誰もがこれが魔法の武器であり、死傷者率比較を是正し、ウクライナ人が戦場で勝つのを助けると言った。しかし、そうではないことがすでに証明されてしまいました。そこで今度は洗練された戦車を与えるという話になる。レオパルド 2 であれチャレンジャーであれ何であれ、洗練された戦車を与えれば、それが魔法の武器になるはずだった。しかしそれもうまくいかない。

そして、9個旅団を訓練し、ロシアの防御を打ち破れるパンツァーの森を作り、1940年にドイツ軍がフランス軍にやった電撃戦をロシア軍相手にやるのだと話す。そして今年の6月4日、ウクライナ軍は反攻を開始し、NATOが訓練し武装させた部隊を大量に投入した。しかしそれもうまくいかなかった。

彼らはロシア軍の最初の防衛線にさえ到達できなかった。彼らは結局、グレーゾーンで戦い、多大な犠牲者を出しました。

では、解決策は？

誰かが言う。「そうです。F-16を与え、ATACMS（陸軍戦術ミサイルシステム、長距離誘導ミサイル）を与えることです。そうすれば、両軍のパワーバランスは逆転し、死傷者の比率も逆転する、戦場ではウクライナ軍が優勢になる」

それはもはや夢物語でしょう。

国防総省で戦争を専門に研究している人たちが、F-16やATACMSが戦場でパワーバランスを変えると叫んでいるとは、とてもまともには信じられない。彼らがこうしているのは、彼ら何かやれることをやらなければならないからです。そしてこれが本当に私たちにできるすべてなのです。

だからやめるわけにはいかない。我々は戦いにとどまり、ウクライナ人を武装させ続けなければならない。

これしかないのです。

我々がここでやっていることは、彼らに武器を与えることです。それは声高に叫ぶことができ、メディアもそれを繰り返すことができます、

ウクライナ人がこれらの兵器を手に入れ、使い方を覚え、F-16の操縦を覚えれば、パワーバランスは是正され、私たちはいつまでも幸せに暮らせるだろう...

繰り返すが、そうはなりません。

いまウクライナ人は深い問題を抱えている。私たちはウクライナを「桜草の道」(迷いの道?)に導いてしまった。現時点で我々ができることは何もありません。

マテ :

西側諸国はウクライナを「桜草の道」に導いており、その結果、ウクライナは破滅に向かうと。

ミアシャイマー :

そういうことです。私が提唱している政策は、ウクライナを中立化し、経済的に発展させ、ロシアと NATO の競争の対象からウクライナを脱却させるというものです。それがウクライナ人にとって最善の策だと信じています。

マテ :

それは 2015 年当時のあなたの警告だった。なぜそう確信していたのですか？

これが避けられない道だと確信したのはどういうきっかけだったのですか？

ミアシャイマー :

2014 年 2 月に初めて危機が勃発したとき、すでに非常に明確でした。危機が勃発したのが 2014 年 2 月 22 日で、その時点でロシアがウクライナの NATO 加盟を国家存立にかかわる危機事態と見なしていることは明らかだった。しかし彼らはそのことを公言しているわけではありません。

もし我々があくまでもウクライナを NATO に加盟させ、ロシア国境の西側の防波堤にしようとし続けるならば、ロシアがウクライナを破壊し、ウクライナを破滅させることは明らかです。ロシアは間違いなくウクライナを破壊するでしょう。

2014年から2022年まで、戦争が勃発し、危機から戦争に発展するまでの間に何が起こったかを見てみましょう、
ロシアは、NATOのウクライナは存立の脅威であることを、次から次へと明らかにしてきました、
しかし、我々はどうしてきたのか？多くの人々が、ウクライナをNATOに加盟させることに、より強力に働きかけるようになっている。当初より私は、これは大惨事につながると考えていた。

今や、多くの人々が私の見解を異常だとみなす。私のような人間、ジェフリー・サックスやStephen F. Cohen（左翼の歴史家）などは、こういう主張をする一握りの人間でした。

しかし、考えてみれば、NATOの拡張が議論されていた1990年代には、外交政策の権威の中には、NATOの拡張は大失敗に終わると言う人が大勢いたのです。

その中には、ジョージ・ケナンやウィリアム・ペリー（当時の国防長官）のような人々も含まれていました。

マテ：

ウィリアム・ペリーはもう少しで辞任するところだったそうです。彼はNATO拡張の問題で辞任しかけたと言っています。クリントンがNATOを拡張したとき、彼は辞任を考えたと言っていました。

ミアシャイマー：

はい、その通りです。その時は国防総省内部でもNATOの拡張に反対する声が広がっていた。そして、これらの人々は正しかったということです。

私のお気に入りの例のひとつが、アンゲラ・メルケル（前ドイツ首相）です。2008年4月のブカレスト・サミット（ブカレストNATO首脳会議）でウクライナのNATO加盟が決定された。これがトラブルの始まりだった。メルケルと当時フランスの指導者だったサルコジは、2人ともウクライナの

NATO 加盟に断固反対していた。彼女は後に反対した理由を語っている。それはプーチンが加盟決定を宣戦布告と解釈すると分かっていたからだ。

つまり、ジェフ・サックス、スティーブ・コーエン、ジョン・ミアシャイマー以外にも、NATO を東に拡大しようとするこの十字軍全体が大失敗に終わると理解していた人は大勢いたのです。

マテ :

プーチンはポーランドにベラルーシを攻撃しないよう警告し、ベラルーシは現在、ワグネル戦闘員を受け入れています。彼らの一部はウクライナに戻るか、あるいはポーランドと新たな戦線を開くかもしれないと語っています。新たな戦線が開かれる恐れがあるのでしょうか、それともこれは大げさな反応でしょうか？

ミアシャイマー :

まあ、それは一つの可能性のある前線に過ぎません。ほかにも前線となりうる地域はたくさんあります。むしろ主要な前線は黒海です。ロシアが黒海のウクライナの港を封鎖しようとしているのは明らかだ。そこでの紛争勃発の可能性は現実的です。

すぐ近くのモルドバの問題もあり、そこでの紛争の可能性についてさまざまな情報がある。

そしてバルト海。ロシアはバルト海を非常に重視している。カリーニングラードへ行く唯一の道だからです。バルト海を囲むロシア以外の国々を見ると、スウェーデンとフィンランドが最近、方針を変更し NATO に加盟しています。

北極圏に目を向けると、この先を見据えて、北極圏は私を非常に不安にさせる。北極圏では氷が溶け、水の支配権や領土に関するさまざまな問題が生じている。ロシアと NATO は互いにぶつかり合っている。北極圏には 8 つの国

があります。ひとつはもちろんロシアだ。残りの7カ国はすべて NATO 加盟国で、フィンランドとスウェーデンが加盟しています。

北極圏、バルト海、モルドバ、黒海、そしてあなたが提起した問題は現時点で最も懸念されている問題です。それはポーランドが主にベラルーシで参戦することです。

ポーランド軍がウクライナ西部に進駐したらどうなるかという問題もある。ベラルーシの指導者であるルカシェンコは、これはベラルーシには受け入れられないと主張している、

ポーランドがウクライナ西部に侵攻し、ベラルーシが戦闘になる状況は想像できる。その場合、ウクライナ西部でロシア軍がポーランド軍と戦うことになる。その可能性が高いとは言わないが、あり得る話です。

ポーランドとベラルーシの国境を見ると、すぐ近くにワグナー軍がいる。当然のことながら、ポーランドはワグナー軍がポーランドに対して何もしないように、自国の軍隊を増強しています。つまり、ベラルーシとポーランドの国境では、ワグナー軍とポーランド軍が目と鼻の先にいるわけです。これは決して良い状況とは言えません。

ワグネル部隊の責任者プリゴジンの指揮系統がどうなっているかは誰にもわかりません。だから、ここにはさまざまなアクシデントやトラブルの可能性があるので。

いま望める最大目標は「冷ややかな和平」

私が言いたいのは、ウクライナと西側諸国、そしてロシアとの間で意味のある和平合意は得られないということです。私たちが望むことができるのは、「冷ややかな和平」です。

冷ややかな和平では、ロシアは常に自分たちの立場を向上させる機会を探し、ウクライナと西側諸国も同様の行動を取るでしょう。どちらの場合も、これは相手を貶める機会を伺うことになります。

そのような冷戦状態に陥った場合、何かの機会でエスカレートして熱い戦争に戻る可能性は大きい。

直接の前線ではなく、先ほど話したような、戦争が勃発する可能性のあるさまざまな地域があります。

ですから、ロシアと西側諸国、そしてウクライナとの間の状況は、今後長い間、非常に危険なものになっていくと思います。

ロシアの領土的欲望はどこまで膨らむのか

マテ：

最後に、ロシアは2014年のクリミアに加え、ウクライナ侵攻時にすでに4つの州を併合しています。

あなたは先ほど、ロシアはもっと多くの領土を取りたいと考えていると述べました。ロシアが満足して侵略をやめるのはどこだと思いますか？ロシアの領土的野心の行き着く先はどこだと思いますか？

ミアシャイマー：

非常に一般的な言い方になるが、ロシアは軍事的に可能であれば領土を取りたいと考えています。このことを理解することは重要だと思います。

もし軍事的にできるのであれば、ロシア語話者やロシア系民族が多く住む領土を取りたいでしょう。

だから、現在占領している4つの州に加えオデッサとハリコフ州を占領することになると思う。

しかし、ロシアの占領に対する抵抗は甚大なものになるだろうから、ウクライナの中心州やウクライナ人の多い地域には近づかないでしょう。

つまり、ウクライナの人口動態から考えて、ロシア軍が占領できる領土は限られていると思います。

またウクライナの全土を占領できる軍事力はロシアにはないと思います。

現在支配している4つの州を領土化するためには、現存するロシア軍の規模を拡大する必要がある。すでに領土化しているクリミアが含まれます。そこに4州の西側にあるハリコフやオデッサも含まれるでしょう。私はこれに加えてさらに4つの州を占領しようとすると思う。

現在併合している4つの州の西側にさらに4つの州を取れば、ウクライナの領土の約43%がロシア軍の手に渡ることになります。そうすると、ロシアはウクライナを残骸国家として、機能不全に陥れたまま扱うようになるでしょう。

ウクライナの立場からすれば、このような結果になるとは考えたくないだろうが、正直なところ、これがこの戦争の行き着く先だと思う。

ロシアは今もう、強硬手段に出てきていると思います。2022年3月、あるいは2022年2月に戦争が勃発する前の、ウクライナの中立と引き換えにロシアがウクライナから撤退するという状況は、先ほど申し上げたように、とうに過ぎ去ったのです。

そのような時代は過ぎ去り、強硬手段に出るロシアは、できることならさらに多くの領土を征服し、ウクライナを破壊するためにあらゆる手段を講じようとしているのです。

ロシアが核兵器を使用する可能性は低い

マテ：

最後に核の脅威についてです。

最近、セルゲイ・カラガノフというロシア人の論文が発表されました。彼はロシア外交防衛政策評議会の学者でした。プーチンに近いと言われている。

彼は基本的に次のように述べています。

「ロシアは核についてもっと好戦的な姿勢を取る必要がある。先制核兵器の使用をためらうべきではない、西側を十分に脅すためにウクライナで核兵器を先制使用すると脅す必要さえある。

あなたがこのエッセイをもしご覧になったのであれば、どう思われましたか？

またこの戦争そのものに関して、全体として、核兵器の使用、核戦争の脅威の可能性があるとお考えですか？

ミアシャイマー：

核戦争の可能性が高いのは、ロシアが負けて来た場合だと思う。

* ロシアが負けている場合。たとえばウクライナ軍がウクライナ東部と南部でロシア軍を包囲している場合、

* 制裁が効いて、ロシアが大国の地位から転落する寸前まで追い込まれた場合、

そのような状況では、ロシアは核兵器に目を向け、ウクライナで核兵器を使用する可能性が高いと思う。

核の使用には二段階ある。NATO に対して核兵器を使用する勇気はないだろうが、核兵器の限定しようには手を出さだろう。

私は、ロシアが負けておらず、むしろ勝っているという事実を考えれば、核戦争の可能性はかなり低いと思う。

核戦争の危険は依然として残り、可能性がなくなったとは言えない。

しかし、ロシアが戦闘で優位に立ち、少なくとも劣勢に立たされていない限り、ロシアによって核兵器が使用される可能性は非常に低いと思う。

「冷たい平和」と「醜い勝利」

さて、カラガノフの記事についてだ、

私は、ロシアが勝利する可能性は高いが、ここまで私が使ってきたレトリックを延長すれば、それは「醜い勝利」になるだろうと読んだ。

彼は、ロシアが決定的な勝利を収めるわけではないことを理解していると思う。

- * 中立のウクライナを手に入れることはできないし、
- * 西側諸国が手を引くような状況にはならない。

カラガノフは、ロシアがさらに領土を獲得し、ウクライナを機能不全の残骸国家に変えたとしても、せいぜい「冷たい平和」が得られるだけで、非常に危険な状態が続くことを理解していると思う。

サブスタックの記事 (<https://substack.com/search>) で、私はこれを「醜い勝利」と呼んだ。

彼が基本的に言っているのは、それが長期的にロシアにとって受け入れられるかどうかはわからないということだ。

ロシアが長期的にそのような状況で生きていく余裕があるかどうかはわからない。

ロシアが核兵器を使用するとしたら、それは西側諸国への警鐘のメッセージになるかもしれない。「手を引かなければならない」と伝える手段になるかもしれない。

言い換えれば、カラガノフは威嚇的な目的のために核兵器を利用しようと言っているのだ。

カラガノフは、西側に手を引かせ、西側の行動を改めさせる目的で、限定的な核兵器の使用に関心を示している。

彼は、そのことでこの醜い勝利に終止符を打たせ、ロシアが何らかの意味のある和平合意を獲得し、何らかの意味のある勝利を収めるために核脅迫を利用しようとしてる。

私は彼が正しいと思う。ロシアはせいぜい「醜い勝利」を収めるのが関の山だ。

それを理解することが重要だと思う。

ロシアは決定的な敗北を勝ち取ることはできない。この物語に本当のハッピーエンドはない。

それはおそらく受け入れがたいことであろう。人々は「冷めた平和」を超える方法を見つけていかなければならない。

さて、それは実現しそうな議論だろうか？ それは何とも言えない。

なぜなら、「醜い勝利」がどんなものになるのか、正確にはわからないからだ。

第二には、誰が将来ロシアを支配することになるのかわからないからだ。

この「醜い勝利」が苦々しいものになりつつあるとき、誰がモスクワで核の引き金に指をかけるのか、わからない。

その人物が核兵器の使用を容認するほど大胆な人物かどうかもわからない。

ロシアが耐え難い状況にあるからといって、誰かが核兵器の使用を容認する可能性はあるのでしょうか？

そうだ。ありうる。しかしそれで勝ったとしても、それは醜い勝利であり、受け入れられるものではない。

たしかに可能性はある。セルゲイ・カラガノフのような人物が政権を握り、核兵器の使用を考える可能性はゼロとはいえないと思う。

そうならないに越したことはないが、確かなことは誰にもわからない。

ご存知のように、未来を予測するのは非常に難しい。しかし、私は予測がきわめて困難な事態がいま、ここで起こっているのだと思う。

この戦争がどのような結果になろうとも、私たちがこの戦争によって、どれほどのトラブルに巻き込まれるかは明らかだ。

前にも言ったように、もしロシアが負けそうなら、核兵器が使われる可能性がある。

カラガノフが言っているのは、核兵器が使われるか否かではなく、戦いが勝か負けるかでもない。

たとえ誰が勝ったとしても、それは醜い勝利になるだろうし、いずれにせよ核兵器を使わなければならないかもしれないということだ。

その結果、私たちはどうなるか、カラガノフはそのことを考えたいのだろう。

ウクライナが負けそうな時、NATO はどうするのか

そして、もしウクライナが本当に負けているのであれば、ウクライナ軍がひび割れ、その打撃が1917年の春にフランス軍が直面したような。壊滅して敗走するような事態につながると仮定してみよう。繰り返すが、そうなるとは言っていないが、可能性としてはあり得ることだ。

NATO はどうするのか？ ウクライナが戦場でロシア軍に深刻な形で敗北している状況を受け入れるつもりなのだろうか？

私はそうは思わない。そのような状況では、NATO が戦闘に参加する可能性もあるかもしれない。

ポーランド人が自分たちだけで戦いに参加しなければならないと決断し、ポーランド人が非常に重要な形で戦いに参加することになれば、私たちも戦いに参加することになり、片や米国、片やロシアを巻き込んだ大国間戦争が勃発するかもしれない。

繰り返すが、これがあり得るとは言わないが、可能性はある。

私たちがここでやっているのは、この戦争が時間とともにどのように展開するかについて、たしからしいシナリオを紡ぎ出すことだ。

しかし、そうやって思いつくシナリオのほとんどは、不可避免的に不幸な結末を迎える。

繰り返しになるが、2022年2月24日までにこの紛争を解決しようとしなかったことが、いかに大きな過ちであったかを示している。

マテ :

今のこの答えだけで、なぜあなたが最近の作品の内容を完璧に表現している。

書名は「前途の闇：ウクライナ戦争はどこへ向かうのか？」

実に的確だ。

ミアシャイマー教授、どうもありがとうございました。

ミアシャイマー :

どういたしまして。お招きいただきありがとうございました。